

同志社の創立者 新島襄の生き方・考え方（建学の精神）

講演	井上 勝也（いのうえ・かつや）
講師紹介	同志社大学名誉教授

皆さんは、同志社大学に入学されて前向きで学生生活を送っていますか？ただ今ご紹介いただきました井上勝也です。私は現在76歳、皆さんの先輩です。昭和29（1954）年に文学部に入学し、平成16（2004）年に退職しました。学生・教員を合わせて丁度半世紀同志社大学と共に過ごしました。

私は、実は同志社が第1志望ではなかったのです。入学してもややもした気持ちで数ヶ月を過ごしていましたが、明治8（1875）年設立という日本の大学の中で最も古い大学の一つである同志社大学には他の大学にない、良い伝統、学風があるに違いない。同志社に横向きで私の貴重な青春を過ごすのではなく、前向きになって同志社の良さを発掘してやろうと考え、私は2年生以降は積極的に授業に出ました。野球の同立戦も応援に行きました。4年生になって私は同志社が第1志望ではなかったが、入学してよかった。同志社は良い大学だと思うようになりました。今から同志社が良い大学である理由を申します。

教育とは何か

それを話す前に皆さんにお尋ねします。「教育とは何か」という問いです。「教育は教師が生徒・学生を教えるべくむこと」というように『国語辞典』に書かれています。教師が教育の主体で、教師の学問の蓄積や人生経験を生徒や学生に教えるというのです。こういう教育を注入主義教育と言います。教師は教える人、生徒・学生は学ぶ人というように縦の関係です。これに対して教育の主体は教師ではなく、生徒・学生であると考え、教師が彼らの知的欲求を刺激し、彼らが何故だろうという問いを発しながら自力で正解にたどりつくのを側面援助する、いわゆる開発主義教育があります。この場合教師と学生は縦ではなく横の関係で、この教育をやって教育効果を挙げたのは札幌農学校にやってきたW. S. Clarkです。Boys, be ambitious!のClarkです。明治10（1877）年5月上旬、彼は京都に来て今出川キャンパスを歩いて、新島夫妻に会い、何がしかの寄付をしてきています。新島はAmherst Collegeで1867年の秋Clarkに化学（chemistry）を習っているのです。

君たちが小・中・高・大で受けた、或いは現在受けている教育はどちらでしょうか。注入主義と開発主義がまざっている場合があるでしょうが、概していえば、日本でおこなわれている教育は教師が主体になり、教師が語ったことを生徒・学生が覚える、ノートに書く、暗記する教育が多いです。それに対して同志社の教育は伝統的に開発主義の立場に立っています。これは教師の教育観にかかわることですから、全ての教師とはいえませんが、学生に考えさせる教育をやっているといえます。

私は第2次大戦中に小学校教育を受け、100%注入主義教育を受けました。教師のいうことは正しいのだから信じなさいと言うのです。国家主義、軍国主義教育の場合、徹底的に教師が主導権を握っています。ある時、教師は我々に「お前たちは早く大きくなって兵隊さんになって、戦地へ行け」と言いました。我々小学生はそれを信じ、兵隊さんになるのが男子の理想です。昭和20（1945）年8月、日本は敗戦を迎え、これまで国家やメディアや教師が言ってきたことが嘘であったことがわかってきました。このような体験をした我々の世代は中学・高校時代、教師がいうことを鵜呑みしないで、本当かな？と疑ってかかりました。我々は国家主義の被害者ですから、同志社に入ってもそのような傾向から抜け出せませんでした。

同志社大学の伝統

昭和29（1954）年、私は同志社大学文学部に入学しますと、大学が学生の自主性、主体性を尊重し、学生に考えさせる、即ち教師が答えを出すのではなく、学生が自らで答えを探す教育が同志社の伝統であることがわかってきました。このような傾向は開発主義教育の立場に立つ創立者新島襄の教育観にルーツがあるのです。以上が今日の講義の第1段階です。

新島襄の青年時代

第2段階に入ります。今日は君たちが学んでいる同志社大学の創立者新島襄はどのような青年時代を過ごしたのか、どんな考え方をしていたのかをお話しします。新島は天保14（1843）年、江戸で下級武士の長男として生まれました。当時彼は日本で一番情報が集まってくる江戸で育ったということの一つ押さえておく必要があります。彼の少年時代というのは既に幕藩体制が矛盾を露呈し、西洋列強が極東の日本を侵略する可能性がありました。彼の生まれる3年前のアヘン戦争で清国はイギリスの近代兵器の前に大敗を喫しました。嘉永6（1853）年ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀にやってきた時、新島は満10歳でしたが、現在の10歳よりもしっかりしたものを見方をしていました。彼は今にも戦争が起こり、江戸が焼け野原になるのではと心配しています。彼は日本のおかれている状況を心配し、15歳の時家老の尾崎直紀に次のような手紙を書き送っています。「今不学恐失時、故託儒家欲学書、若及乱敬幹不能学書」（『新島襄全集』3、pp.4-5以下『全集』と略す）。彼は家老に勉学の時間を与えて下さい、と訴えているのです。「今不学恐失時」は皆さんにもあてはまりますよ。時は有限です。4年間の大学生活はアツという間に過ぎていきます。「敬幹不能学書」といっている敬幹というのは新島の元服時の名前で、それまでの七五三太を改めてつけた名前です。新島は15歳で元服して、安中藩に出仕し、日誌をつけたり、藩主の送迎など退屈な時間をもてあましていましたが、彼は勤務時間中に職場を抜け出して蘭学塾に行き、見つかって厳しく叱られています。彼は今にも内乱が起こるかもしれない。外国から攻められるかもしれない秋（とき）に外国の知識を学びたいという気持ちを強くもっていました。万延元（1860）年17歳の彼はオランダ語で天文学や物理の初歩の書物を読んでいますし、幕府の軍艦操練所で数学や航海学を週3回1年10カ月学んでいます。文久2（1862）年19歳の彼はアメリカ製の帆船快風丸（180トン）に乗って江戸と瀬戸内海の玉島の間を航海実習しています。風まかせの帆掛舟と違って逆風でも帆の張り方を変えれば船を前に進めることができる洋式の帆船は彼にとって西洋の合理主義を理解する貴重な異文化体験になりました。

新島の読んだ本

ペリーの来航以降、アメリカ、イギリスに対する関心が高まるなかで、新島は蘭学に見切りをつけて文久3（1863）年英学を志し、また西洋人の考え方を理解するためにD・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の和訳を読んでいます。この本は彼に西洋への関心を強め、主人公クルーソーが緻密な計画と合理的な行動によって絶海の孤島でたくましく生き抜いたことは新島にとって大きな発見であったと思われます。彼が『ロビンソン・クルーソー』以上に大きな影響を受けたと思われるのは、アメリカの歴史や文化を漢文で書いた『連邦志略』で、彼はこの本を読んで英語で次のように書いています。“I read it many times and I was wondered so much as my brain would melted（<sic>）out from my head.” meltedの上の<sic>と書かれているのは原文のままという意味です。文法的にはここは原形が来なくてははいけません。新島はこの本を繰り返し読んで、頭から脳髓がとろけ出るほど驚いた、と書いています。なぜそんなに驚いたかといいますと、まずアメリカには日本にはない義務教育の学校があるということで、日本に義務教育の学校がスタートするのは明治5（1872）年です。それから身のまわりの世話ができなくなったお年寄りが施設で地域の人びとに守られて余生を送っているし、彼が一番驚いたのは、主権在民のデモクラシーが説かれており、国家の指導者（大統領）が人民の選挙で決められるということを知ったからです。この本には1776年の独立宣言文の要約も載っているのです。独立宣言文は基本的人権を高らかにうたい上げています。人間の生まれながらの平等、生命、自由、幸福の追求の権利を主張し、これを保障するために政府がつくられたというのです。新島は独立宣言文の要約を漢文で読んでどこまで理解できたかわかりませんが、脳髓が頭からとろけ出る程驚いたという最高の驚きのなかにこの独立宣言文も入っているのではと思います。

新島は、幕末の日本とは全く異なる国があることを知って、アメリカに関心を抱きます。キリスト教関係の本も読んでいます。当時キリスト教関係の本を読むことは禁じられていましたが、中国からかなりの量のキリスト教関係の本が密輸入され、外国に関心のある若者たちに読まれていました。彼らは漢文は容易に読めましたが、キリスト教というよりも外国を理解するために読んでいました。国防の責任を負う武士である新島は幕藩体制の崩壊の危機を目の当たりにし、アヘン戦争やクリミア戦争の情報やロシアの南下の動きに危機意識をもっていました。

当時の若者たちが尊王攘夷や倒幕の運動に関心を示すなかで、新島は国禁を犯して国外脱出をはかり、先進国を自分の目で見たい、キリスト教を自由に学びたい、そして将来日本の近代化に貢献したいと考え、21歳の彼は元治元（1864）年函館から密航を企てました。21歳といえば君たちの年齢ですね。当時海外渡航は厳しく禁じられていましたので、見つければ死刑を含む厳罰を覚悟しなくてはなりません。彼は非常に慎重に密航の準備をして、大胆に決行しています。私の40年近い新島研究の結果、彼の密航は個人的欲望を満たすためではなく、日本の改革に貢献したいという強い願望があったからだと思われます。

ニューイングランドへ

第3段階に入ります。新島が密航に成功して行き着いた町はアメリカ合衆国のニューイングランドでした。慶応元（1865）年彼が太平洋岸のカリフォルニアに到着しておれば、ゴールドラッシュと大陸横断の鉄道建設に湧くカリフォルニアでは別の新島が生まれたかもしれませんが。彼が到着した1865年7月、南北戦争終了後のニューイングランドにはアメリカの伝統、即ちピューリタニズムとデモクラシーが比較的純粋な形で残っていました。江戸で21年間生活した彼には全く異質の文化圏であるニューイングランドに、彼はあまり英会話はできませんでしたが、うまく適応しています。彼は上海から乗船したワイルドローヴァー号の船主であるA・ハーディーに保護されて、1778年創立の名門校フィリップス・アカデミー（Phillips Academy）に編入学するのですが、この学校は後年彼が入学するアンドーヴァー神学校と同じキャンパスにありましたから、神学校の学生の生活態度が日常的によく見えるのです。彼はお父さん宛の手紙に次のように書いています。神学校の学生は「正直真実にして一切酒、煙草を不用」（『全集』3、p.33）、ひたすら「天上独一真神の道を修め、此世の罪を償へる聖人イエジウスの教えを守り日夜不怠祈禱致し」（同上p.34）としているのです。彼はキリスト教が人間の生き方を全面的に規定する宗教であることをニューイングランドの人びとの生き方から理解し始めるのです。彼は慶応2（1866）年12月に洗礼を受けて正式なクリスチャンになりました。彼は又お父さんに次のように書いています。「人々小子を愛敬し、大学校の頭取、聖学校の教師に至る迄も小子を親切に取扱ひ、路上に出逢ひ候ハ、手を握り（此の国の礼なり）今日は如何御座ある哉と丁寧に挨拶いたし呉候」（同上p.35）。

新島は日本にあって『連邦志略』を読み、アメリカという国を理想視していました。21年間身分制に縛られ「三尺下って師の影を踏まず」の倫理観―三尺は90センチですが、弟子が先生のお供をして歩く時は三尺離れて先生の影を踏まないようにすべきである―という典型的な縦社会の倫理観を叩き込まれていた彼にとって、フィリップス・アカデミーの校長もアンドーヴァー神学校の教授も生徒である新島に歩み寄って、「新島さん、お元気ですか？」（How are you?）と言ってくれることを父親に伝え、人間平等のデモクラシーが如何に素晴らしいかをわかってもらおうとしているのです。ニューイングランドの教師と生徒は、縦ではなく横の関係であることを彼は理解し始めています。

当時の手紙の運ばれ方

ここで皆さんの疑問にお答えします。慶応3（1867）年という時代に、新島の書いた手紙がどのようにして日本に運ばれ、父親のもとに着いたのかという疑問です。実の息子同様に世話をしてくれるA・ハーディーという人は17隻も貿易船を世界の海に走らせている船会社の社長だったのです。だから新島にウチの船が今度上海に行くよとか同業者の船が横浜に行くよという情報を逐一知らせてくれるのです。そこで新島は手紙を書いてハーディーに託しますと、例えば横浜行きの船の場合は横浜にいるアメリカ人の宣教師がそれを受け取り、江戸にいる新島の父親に回送してくれるのです。日本が万国郵便連合に加盟したのは明治10（1877）年ですから、新島の手紙は今申したような方法で約3カ月かかって運ばれるのです。今ならe-mailでその日のうちに届きますが。

新島は慶応3（1867）年6月にフィリップス・アカデミーを卒業し、同年9月からマサチューセッツ州のアーモスト・カレッジ（Amherst College）に入り、ここで3年間学びました。彼の教育観はもとよりキリスト教観、或いは理想国家像もこの3年間でほぼ固まったと思われる程アーモスト・カレッジから大きな影響を受けています。時間の都合で詳しく話せないのが残念ですが、図書館で私の『新島襄 人と思想』を始め他の研究者の文献をひもとかれることをおすすめします。

シーリー教授の言

一つ新島がアーモスト・カレッジで彼の教育観に大きな影響を与えたものをご紹介します。彼の指導教授であるJ. H. Seelye教授がしばしば学生に言っていたのに“Amherst aims to teach its student how to think for himself.” というのがあります。アーモスト・カレッジの教育目的は学生に知識を与えることではない。彼らにどのように考えるのが一番いいかを自分で考えさせることにある、ということです。彼らは試行錯誤しながら自力で正解にたどりつく。このような経験を積むと自分で問題解決ができる人間になるのです。

endかbeginか

君たちは英語で卒業式をどう言いますか。graduation, commencement (beginning) でしょう。日本語で卒業式というのは学業を終える式というendの意味です。先生はもうあなたがたに教えるものはありません、という訳です。ところがアメリカではなぜbeginning（始まり）なのでしょう？アメリカでは今日からあなたは一人立ちして社会に出て行くので、自分ですべてを解決しなくてはなりません。大学であなたが一番良いと思う考え方を見つけたでしょう。さあ、今日があなたの本当の一人立ちの日です。始まりです。beginningだということです。新島は同志社で「自治自立の人民」を育てると言っています。自ら治め、自ら立つことのできる人間はindependentな人間です。近代国家をつくるには明治政府が考えるような国家に従属するdependentな人間でなく、国家の方針にクレームをつけ、軌道修正を求める、或いは自分が国家をリードしていく、そのような人間が必要だと考えていたのです。君たちはこのような考えをもった創立者の大学で学んでいるのですよ。

自主独立の人間

新島がニューイングランドで、そしてアーモスト・カレッジで学んだことは、自分で課題を見つけて考える、自分で答えを見つけることが大切で、広い視野から物事を見て、正しいと思ったことを勇気をもって実行する、人びとの顔色を見てどうしようかといった消極的な態度をとるのではなく、自分の言動に自信をもつということです。「木を見て、森も見よ」という諺があります。木だけを見て判断するのではなく、木が生えている森全体も見なさい、という意味です。新島はアメリカやヨーロッパを見て、木を見て森を見ることのできる人間になりました。8年という一番長かったニューイングランドから見たアメリカ衆国を彼は理想視していました。彼はプロテスタント・キリスト教とデモクラシーを国造りの柱にするとする考え方を持ち、アンドーヴァー神学校でニューイングランド神学を学んで宣教師の資格を得て明治7（1874）年11月に10年ぶりに帰国しました。

top-downか

bottom-upか

第4段階に入ります。新島が帰国した明治7年には、明治政府は手探りながら国家主義と天皇制を柱とする近代国家の形成を始めていました。文明開化の政策です。それは日本の風土、伝統に合ったtop-down方式で、新島の考えるキリスト教とデモクラシーを国造りの柱にするbottom-up方式とは異なるものです。明治政府は人民を国家に従属させるために、国家に忠実なる臣民の育成を目指していました。それに対して新島の考えた人民は、知性と良識をもって国造りに積極的に参加し、国家が傾きそうになった時には主体的に建て直しに貢献し、人民が主権をもった民主主義国家を理想視していました。彼は明治21（1888）年、次のように申しています。「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり」（『同志社大学設立の旨意』『全集』1、p.140）。

新島は勝海舟に同志社の完成は何年を期しているか、と問われて、200年を考えています、といったと言われています。今年で同志社は137年目です。新島は日本の歴史や風土を考えて、民主政の国家をつくることは容易でないと考えていましたが、決してあきらめませんでした。民主政は一番優れた政治形態であると確信し、民主政を実践する人たちを同志社で育成し、全国で活躍することを望んでいました。彼はキリスト教を日本に広めることが最も困難であることも知っていました。しかし彼はひるみませんでした。万難を排して日本の風土にプロテスタント・キリスト教を広め根づかせようと考えていました。何と1000年もの間日本の首都であり、仏教と神道勢力が日本で一番強い京都の地にキリスト教の中等教育機関をつくり、それを同志社大学に発展させようという壮大な構想を持ち、それを着実に進めていきました。

山本覚馬

10年も日本を離れ、幕府の崩壊と新政府の樹立の時期に日本にいなかった新島に強力な助っ人を申し出た人がいます。山本覚馬という会津藩の軍事取調役兼大砲頭取をやった人物です。来年1月から始まるNHKの大河ドラマの主人公山本（新島）八重の17歳年上の兄です。

山本覚馬は現状分析と将来展望のできる人でした。世界勢も適格に掴んでいました。彼は佐久間象山、勝海舟に教えを受け、横井小楠の思想の影響も受けています。彼は目が見えません。脊髄損傷で体が不自由でしたが、ファイトの固まりのような人です。彼は京都府顧問になって衰退した京都を活性化し、新島襄を助けてキリスト教主義の学校を京都に開設することに成功すると共に、京都府の初代府会議長をつとめ、商工会議所の会頭をつとめました。この山本も新島も極めて危険な橋を何回も渡っています。彼らの生き方を見ていると決してあきらめないこと、不可能を可能にする強い意志と行動力をもっていたといえます。

もう一つ重要なことを言います。新島が日本の風土にキリスト教を定着させようとし、彼は教育の根幹にキリスト教を位置づけようとした明治の教育者の中で先駆者の一人です。彼はそれを大変苦勞して実現させようとした。その理由は人間を社会や国家を変革する能力をもった存在としてとらえた場合に、彼らもっている知性を磨いて、近代国家の建設に用いるのですが、その場合知性が暴走しないように、知性を悪用しないようにしなくてははいけません。知性が正しい目的に用いられるためには、しっかりした道徳性でガードされる必要があります。そしてその道徳性はキリスト教によってコントロールされるべきだと考えたのです。彼はニューイングランドの人達からの生き方からヒントを得ています。

知徳併行

彼はしばしば「知徳併行」という表現を使い、次のように申します。「神を知り、敬し、恐れ且つ信愛するは人の最も大切なものにして、之無くんば人迷に陥り、又は物の奴隸となり、決して自由の人になる能はず」（原文片仮名、「文明の基』『全集』1、p.346）。人間は罪深い存在でありながら、神によってゆるされ、守られ、力を与えられている。決して一人で生きているのではないことを悟り、知性を神の喜びたもう目的に用いるならば、知性を暴走させることはない。神の声としての良心（conscience）が知性を正しい目的に用いる方向性を示すというのです。

京田辺校地の入口に良心碑が立っています。「良心之全身二充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ 新島襄」と書かれています。良心というのは何が善であり悪であるかを考え、善であれば実行し、悪であれば排除する道徳の中核概念です。これは新島校長が当時の5年生（最上級生）であった横田安止にあてた手紙のなかで書いている文章ですが、彼は良心が身体全体に充滿しているような若者がこの同志社から生まれ、社会に出て活躍してほしいという強い願望を示しているのです。もう一つ申しておきたいことは新島が学んだアーモスト・カレッジでは毎年体育が月曜から金曜まで必修でした。彼が知・徳・体の調和のとれた人間を理想視したのは生きた人間をトータルにとらえているからです。

山中伸弥教授

ノーベル医学・生理学賞の受賞が決まった山中伸弥教授は高校時代は柔道、大学ではラクビー、そして社会人になってマラソンをして身体を鍛えていますね。教授は30歳代前半に3年間サンフランシスコのグラッドストーン研究所に留学して、所長に言われた言葉にvisionとwork hardがありました。work hardだけではだめで、vision（洞察力）即ち物事の本質を見抜く力を培うことが不可欠だとされたそうです。洞察力は日本的な覚える教育、縦の教育からは無理です。学生がいつも何故だろうwhy?という疑問をもちつづけ、自力で疑問を解決する習慣を幼少年期からつけていることが必要です。山中教授もそうだと思います。

新島に勇気を与えた聖句

新島は人生に何度ももう駄目だと思ったことがあります。京都の地にキリスト教主義の学校をつくることは無理な話です。仏教勢力、神道勢力の反対はもとより京都府も常に厳しい監視を怠らない。今でいうスパイを学内に送り込んで教師が聖書を教えていないかを監視し、新島はたびたび始末書を書いて京都府に提出しています。宣教師たちは聖書が使えないのであれば学校を閉校して大阪へ移ろうと言い出しました。新島が四面楚歌で苦しんでいる時に彼に勇気を与えてくれた聖句があります。それは旧約聖書のヨシュア記1章9節の「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」です。人間は罪を犯す弱い存在です。しかし神さまはそのような人間をゆるし、力を与えてくださる。正しいと信ずる道を勇気をもって歩む限り嵐が吹いても神さまは守ってくださることを信ずる人間は強いです。

ゲーテの『ファウスト』

18世紀から19世紀にかけて活躍したドイツの文豪ゲーテは彼の主著『ファウスト』の中で天使に「絶えず努め励むものをわれらは救うことができる」と言わせています。これはゲーテの世界観であり、当時の欧米人の世界観でもあります。絶えず正義を求めて努力する人間は、ちゃんと神さまが天上から見ている、正しい道に導いて下さるというのです。18世紀に活躍したアメリカ人の父といわれたフランクリンは“*Heaven helps those who help themselves.*”（天は自ら助くる者を助く）と言いました。私は新島の生き方、考え方の中に今申したようなゲーテやフランクリンの世界観に通ずるものがあると思います。「人事を尽くして天命を待つ」という諺があります。最善の努力をして、あとは神さまに委ねるという心境です。同志社の教育はあなた方にこんな生き方をすることを求めているのです。

結論を申し上げます。明治21（1888）年11月、全国に発表した「同志社大学設立の旨意」のなかに新島は彼の建学の理念を明確に述べています。例えば同志社大学では「自治自立の人民」を育成するとか「一国の良心」とか「一国の柱石」となる人物を育成するのだと言っています。このような人たちは教師に教えられて、それを鵜呑みにする人間ではありません。自分で考え、批判し、何が正しいかを常に探究する人間です。開発主義の教育を受けた自治自立の人間です。明治10年代新島に学んだ生徒たちが同志社英学校の教育を次のように紹介しています。「啓発自習主義で教師が教えるというよりもむしろ生徒が自ら学ぶ」（『創設期の同志社』p.4）同志社大学は137年間このような伝統を受け継いでいるのです。君たちは以上のような生き方、考え方をした新島襄のつくった大学で今学んでいるのです。まだまだ調べれば面白い発見があります。あなた方自身が積極的に学ぶ姿勢をもてば同志社での4年間の学校生活は充実したものになり、きっと卒業時には同志社で学んでよかったと思うでしょう。ご清聴ありがとうございました。

2012年10月31日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺校地「講演」記録